

教員養成課程におけるダンス授業の学習指導過程の検討

～ダンスを「踊る・創る・指導する力」の育成を目指して～

太田 早織

I. 緒言

1. 研究の背景

将来の変化を予測することが困難な時代に向けて、学校教育の質が問われている。中央教育審議会初等中等教育分科会（2015）は、これからの社会を生き抜く力を育成するために、次期学習指導要領の改訂に向けて論点整理をした。具体的には、これまでの学力観を基にしながらも①「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」②「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」といったように、学習する子供の視点に立った育成したい資質・能力の整理がなされたのである（中教審，2015a）。さらに、これまでの学習指導要領は学習内容が中心に示され、学習方法については示されてこなかったが、次期学習指導要領では、これらの三つの柱をいかに総合的に育んでいくかに重点が置かれる方向であり、学びの量と質の深まりを目指した『課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）（中教審，2015a，p 17）』について記載されようとしている。換言すれば、これからの教員は一層『教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められ（中教審，2015a，p 18）』ているのであり、教員養成課程にとってはどのように学ぶのかを計画・実践していくことのできる教員の育成が必須課題といえる。

さらに、中央教育審議会は（2015b）、これからの学校教育を担う教員の資質能力を向上するには、研修・採用・養成のそれぞれの役割や課題を明確にし、その役割の認識と課題の解決および互いの連携を強化していくよう求めている。大学の養成課程の役割について、『「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行なう段階』（中教審，2015b，p 16）であるとしている。つまり、教員養成課程を有する大学は、免許状取得の過程で修得した知識・技能を基盤に使命感や教育的愛情を持って、さまざまな職務にあたりながらも著しい支障なく教科指導や生徒指導の実践ができる資質能力（教職審，1997）を養成し、上記のような教育の実現に貢献できうる人材を輩出する責任があるのである。

これらのことを踏まえて、保健体育科教員養成課程の「教科に関する科目」における「体育実技」の授業を構成しようとするとき、ただ運動・スポーツの技能を高めるのではなく、指導することを意識させ、教科教育法など授業実践力の養成をねらった科目の受講に向けて課題意識を持たせる必要があると考えられる。ただし、運動領域によってはスタートラインに差が生じることもある。

筆者の私的調査によると、他の運動領域に比してダンス領域に関しては圧倒的に授業等の経験者が少ない。2016年度でいえば、本学の教職課程履修者における小学校～高等学校ダンス授業等の経験者は約23%であった。つまり7割以上が未経験であり、大学ではじめてダンスを実施するのである。換言

すれば、ダンスについて「何をどのように教えればよいかわからない不安」どころか、「ダンスが何かわからない不安」を抱えた学生が多いことを示唆している。

では実際の学校現場のダンス授業の実態はどうか。現行学習指導要領（文科省、2008）より、生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育成することを目指して、ダンスを含むすべての運動領域が小学校～中学校2年まで必修の扱いとなった。これを受けて、中村（2009）は、中学校ダンス男女必修化の課題について調査したが、学校現場では指導に向けて指導者不足・指導力不足であり対応に困難している現状を報告している。また、一時必修化に呼応して、メディアでダンスが取り上げられ盛り上がりを見せたが、「ヒップ・ホップダンスが必修となった」との誤解を生じさせていた実態も報告されており（中村、2013）、ダンスの必修化に向けては学校現場において学習内容の受け止めを含めた混乱が生じたことが窺える。

他方、2014年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」では、中学生の体育授業に関する実態調査がなされ、ダンス授業が「できた」「楽しかった」との問いでは男子約3割女子2割弱が「あまりできなかった・できなかった」「あまり楽しくなかった・楽しくなかった」と答えている。また、「もう一度やりたいか」との問い（複数回答）では、「もう一度やりたい」と答えた生徒は男子17.6%女子36.8%に対し、「もうやりたくない」と答えた生徒は男子23.9%女子13.1%であった。

つまり、学校現場においては“経験の浅く指導に自信がない教員”が“関心の高低差が激しい生徒”に指導をする現実があるのである。この現実ゆえ、教員養成課程におけるダンス指導力の保障は必要不可欠であり（中村、2009）、教員を志望する学生がダンスを苦手・嫌い・未経験であろうとも「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な」資質能力の保障に向けて授業を展開しなければならない。

以上のことから、ダンス授業にかかわる技能・知識の確実な習得はもちろんのこと、アクティブ・ラーニングにかかわる指導方法については、せめて授業内で経験することを保障する必要がある。この実現には、授業内容の構造化と教材・方法の精選をし、ダンス領域の技能や知識の獲得と同時に指導方法の工夫も経験的に学習させることが可能な学習指導過程が必要である。それと同時に絶えず授業の有効性について検証していく必要がある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、保健体育科教員を目指す学生のダンスの「踊る・創る・指導する」力の育成に向けて、現行学習指導要領のダンス領域に示されている技能（＝教師としての示範能力）、（教師に必要なダンス・技能についての）知識の習得、およびアクティブ・ラーニングの実践を考慮した学習指導過程を計画・実践し、その授業の有効性について履修学生の自由記述および〈踊る・創る・指導する〉ことに対する自信の程度の経過から検証することを目的とした。

なお本稿は、研究の第一弾として単元前半から中盤の内容、すなわちフォークダンスと現代的なリズムのダンスの学習に焦点を当てたものである。

Ⅱ. 研究の方法

1. 対象と調査時期

2016年度に「教科に関する科目」の「スポーツ実技種目（ダンス）」を履修したK大学2年生のうち、保健体育科教員養成課程を履修しかつ無欠席・ダンス歴のない学生30名を対象とした。

授業の実施・調査期間は、2016年4月～11月であった。

2. 実施した学習指導の過程と内容・方法について（表1）

【実施授業の計画】

中・高等学校の授業と同じ時間制限で一つの学習を完結させることを意図して、1コマの授業を概ね45分程度に区切ることにした。単元の前半は、1コマの前半を伝承型ダンスである「フォークダンス」、後半を創作型ダンスである「現代的なリズムのダンス」を配列した。また、単元の後半は「創作ダンス」について1コマの前半後半で2つの学習内容を扱うよう計画した。学生が授業の流れをつかみ学習に従事しやすいよう、毎時概ね同じ流れで授業を計画・実践した。また、「ペア学習」を積極的に取り入れ、教え合いや相互評価する機会のある計画をするようにした。

「授業はじめ」では、学習の流れの提示→W-up ①→前回の復習（ペア学習）を必ず配置した。W-up では、心ほぐしのレクリエーションにくわえ、学習内容に関連するリズムダンス等を計画・実践した。W-up 後には、既習の学習内容の習熟を意図してペア学習による前回の復習（フォークダンス）を配置し、教え合い・相互評価の機会を設けた。

「授業なか」では概ね、前半：学習①のねらいの提示→〈習得→教え合い・相互評価〉→学習①の発表→中間まとめ、後半：学習②のねらいの提示→W-up ②→〈習得→教え合い→活用〉→学習②の発表を配置した。毎時必ず発表機会を設け、ダンスの特徴である踊る・創ることに親しみをもてるようにしようとした。発表に向けたステップや動きの学習では、一斉指導による習得のあとにペアでの教え合いや相互観察の機会を設けた。このことにより、学習しているステップや動きの習得・理解の促進と評価の観点を持つきっかけをつくろうとした。

「授業まとめ」では、健康状態の確認→学習到達度についてコメント→次回の予告を主に配列した。学習到達度について、1コマの学習内容をふりかえり、ねらいに対するクラス全体の到達度ととりわけ努力した学生などを評価した。毎時授業の学び・感想・課題を記述した学習カードを提出させ、次の授業の際にとりわけよい視点で書けた学生の記述内容を紹介した。

【学習内容の整理と教材の配列】

教材を検討する視点として、学習する内容を整理し、無理なく確実に技能習得が図れ、自信をもって踊れ、知識を獲得しながら作品を創れるようになることを目指した。ここでは単元の前半で行った「フォークダンス」と「現代的なリズムのダンス」について述べたい。

1コマの前半に扱った「フォークダンス」は伝承型ゆえに初めての学生も学習しやすい。ここでは、音楽のリズムに合わせてステップや動きをすること・他のダンスにも活かせる基本的な動きを獲得すること・音楽やリズムの特徴について動きの特徴と合わせてとらえられるようになることをめざした。扱う教材の素材は学習指導要領解説（文科省、2008、2009）に例示されているものを扱い、初めての学生に親しみやすいように、①全員同じ動きのダンス②男性パート・女性パートで対応しながら踊るダンスと段階的な配列とした。ペア学習を取り入れ、一斉学習で習得した内容を習熟させる機会を設けるよう計画した。

1コマの後半に扱った「現代的なリズムのダンス」では、音楽のリズムの特徴をとらえられるようになること・ステップや動きを組み合わせられるようになること・仲間と対応して動きを構成できるようになること・これらを活用して作品を自由に創作できるようになることをめざした。具体的には、①フォークダンスで学習したステップや動きも活かして移動系の動きやステップとその場系の動きやステップとを組み合わせる②繰り返しの中に回る・回す・ねじる動きを入れて変化のある組み合わせで踊る・発表する③ダウンビート・アップビートで全身弾んだ動きを組み合わせる④ユニゾン・カノンや隊形移動など仲間と対応した作品を踊る・発表する⑤グループ創作、と配列し、この内容に即した教材を設定して一斉指導で習得した内容をペア学習で深めたりグループで深めたりする機会を

設けるよう計画した。

【技能習得の視点：学習形態・指導言語の工夫】

技能の確実な習得に向けては上記のように、スモールステップで学習できるよう学習内容・教材を配列した。くわえて、学校体育実技指導資料（文科省，2013）においても小集団による学習を推進していることから、ペア学習で教え合い・相互評価しながら学習できるよう計画した。その際、ただ動き方やステップを提供しても教え合いや相互評価は成立しにくいことから、学生同士の教え合い・相互評価に活かせるよう、指導する際には動きやステップの特徴に対応した指導言語を扱うよう心がけた。その際、教師は積極的に巡回指導するようにし、ペア学習の促進につとめようとした。

また、創作活動のある「現代的なリズムのダンス」に向けては、「音楽に身体を重ね、融合させていく動きの探究の面白さ（岩田，2016）」に迫れるよう、「曲の感じを表現する」という指導言語を積極的に使いながら、動きの指導をするようにした。さらに音楽の速さや低音やアクセントを感じて踊れるよう「ズーンズンズン」などオノマトペ的に口拍子を入れるようにした。

【知識習得の視点】

ダンスに関わる知識の確実な習得に向けて、技能習得と対応し「フォークダンス」ではその踊りや国の文化的背景や踊りの特徴について、ノートに記録させるとともに、主要なステップについてはノートへ図解して提出させ、図・解説の正確さについてA～Eで評価した。

「現代的なリズムのダンス」では、上記の学習内容を授業のねらいに組み込み、学習の前後に解説を加えて理解を促すとともに、実践的に学習した内容（ステップや動き方）と創作した内容についてノートへ記録させた。

【アクティブ・ラーニングの視点】

本授業では、ただ楽しく踊る・創る学習をするのではなく、知識・技能の確実の習得にくわえ、それを基盤としたダンスにおける主体的・協同的な学び（アクティブ・ラーニング）について経験させることをめざした。

アクティブ・ラーニングの実践に向けては、指導方法を工夫して必要な知識・技能を教授しながら、それに加えて、受講者たちの思考を深め、発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど（中教審，2015a）の工夫が必要である。この意味において、現行学習指導要領（2008，2009）における改善の視点である「言語活動の充実」は引き続き重要視されようとしていることから、本研究におけるアクティブ・ラーニングの視点とした。

「言語活動の充実」に向けては、「体を動かす機会を適切に確保した上で、相手や仲間のよい演技に賞賛を送る、互いのよい演技を認め合う、互いに教え合うなどのコミュニケーションを図る学習活動を充実する（文科省，2011）」ことをめざし、様々な学習形態を適用することが推奨されており、小集団による生徒同士・教師と生徒との「対話的学び」の実現に向けた学習の仕方について研究が進められている。そこで、課題を与え達成するために共に協力して学習する姿をめざし、近年再注目されている「ペア学習」を取り入れ、教え合いや相互評価の機会を設けた。「ペア学習」はグループ学習へのプロセスとして位置づけることができることから、合意形成と相互理解を行き来させながら学習させることをめざした。また、ただ楽しく踊る・創る学習をするのではなく、知識・技能の確実の習得にくわえ、より技能・知識を深め、認知→思考→表現のサイクルを保障しようとするとともに、ノートへの記録をつけさせ時折活用しながらペア学習をさせることで学生が指導の視点を持つこともねらった。

3. 調査内容・方法

計画した学習指導過程の有効性を検討するために、以下の内容についてアンケート調査を行った。なお、本調査では回答の確度を上げるために記名形式で行った。

(1) ダンスについての自信について

ダンス授業を実施する上で重要な「踊る」「創る」力に加え、「指導する」力の自信について調査した。10段階で回答させ、その根拠について自由記述を求めた。具体的には、授業受講前の自信および、本稿で焦点を当てている「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の学習を終えた授業中盤の自信について調査した。また、回答の根拠である自由記述については、意味のある文節で区切り、KJ法（川喜田，1967）を用いて分類し、数値との関連について考察した。くわえて、毎時提出される学習カードの記述からも考察をくわえた。

(2) 授業受講前と授業中盤の自信の変化について：

(1)について、学習を通して自信により方へ変化があったかについて、変化の大小を10段階で回答させた。また、その根拠を記述させ、(1)と同様の方法で分類した結果をもとに、学生のダンスへの自信を向上させた要素を抽出し、今後の授業改善の示唆を得ることとした。

(3) その他：対象者の小学校～高等学校におけるダンス授業経験の有無とスポーツ歴を調査した。

(1)～(3)の各内容の項目間の比較について、平均値の差の検定にはt検定を用いた。

Ⅲ. 結果・考察

1. 対象者について

対象者30名のうち、小学校～高等学校においてダンス授業を経験したことのある学生は、9名であった。小学校の経験者は、創作ダンス1名・フォークダンス2名であった。中学校の経験者は、創作ダンス3名・フォークダンス4名・現代的なリズムのダンス2名であった。高等学校の経験者はおらず、高等学校におけるダンスの開講あるいは採択率の低さが窺えた。

2. ダンスへの自信について

2.1. 教材の有効性：ダンスを「踊る」ことへの自信について（図1、表2参照）

2.1.1. ダンス授業受講前の「踊る」ことへの自信

対象者の授業受講前における「踊る」ことへの自信は、平均3.8と低い傾向であった。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は7名、次いで3,4は14名、中程度5,6は7名、やや自信のある・自信のある7～10はそれぞれ1名ずつであった。

以上のように10段階中「踊る」ことへ自信がない1～4を示した学生が21名と多い傾向にあった。自信の根拠に関する自由記述は40個あげられ、ネガティブな記述は32個であった。その内容は「未経験だから」46.9%、「技術がない」18.9%「リズム感がない」9.4%と、小学校～高等学校におけるダンス授業を経験していない学生や経験していてもダンスを踊ることに自信を持っていない・ダンスに重要なリズム感に自信がない学生がいることがわかった。それに対し、ポジティブな記述は8つみられ、「見たことある」「好きだから」できそうとの記述が少数みられた。

2.1.2. ダンス授業中盤の「踊る」ことへの自信

対象者の授業中盤における「踊る」ことへの自信は、平均5.4と中程度であった。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は2名、次いで3,4は6名、中程度5,6は15名、やや自信のある7,8は7名、次いで9,10は0名であった。

以上のように、受講前に比べて1~4を示した学生は8名と少し減少し、中程度である5,6を示した学生が15名と自信が中程度の学生が増える傾向にあった。自信の根拠に関する自由記述は40個あげられ、ポジティブな記述が増え32個であった。その内容は「思ったより楽しく踊れた」37.5%、「学習が自信につながった」25.0%「踊り方がわかってきた」9.4%と、本授業で扱った教材がポジティブに作用していることが示唆された。とりわけ、ダンスに対する未知・難しそうとのイメージが本授業を受け成功体験を味わうことで軽減されたと思われる。ただネガティブな記述も8つみられ、「うまくはない」との自己評価を厳しくつける学生のほか、「苦戦する内容もある」「速い動きが苦手」など学習内容が難しいと感じている学生が一部いる可能性が示唆された。

2.1.3. ダンス授業受講前と中盤の「踊る」ことへの自信の変容について (図4参照)

対象者の受講前と中盤における「踊る」ことへの自信について、受講前に比して中盤では平均1.6ポイント高まり、0.001%水準で有意に高まっていた。経験のない・浅い学生らが本研究で計画した授業の受講を通して、個や仲間と踊る楽しさを感じ、かつ教え合いや相互評価の機会を設けたことが少しずつでも着実に踊ることへの自信をつけていったものと思われる。

学習カードの記述をみると、ダンス実践の学習が本格的にはじまった3回目の記述には「難しいこともあるけれど、思ったより楽しい」「意外とできた」との内容がみられ、本研究で計画した授業を経験することで小さくとも成功体験を味わうことができ、技術習得への不安が軽減したと思われる。また同回では、「ペアと協力すると習得が早い・楽しい」「リズムが取れると楽しい」「知っている曲は踊りやすい」との内容がみられ、ペア学習に対する肯定的な意見や、扱った教材によってリズムに合わせて踊ることへの不安が軽減されたことが窺えた。

学習カードについて4回目以降は、「ペアで学習することの意義」に関する記述や「選曲の重要性」に関する記述が増えてきた。また、「もっと技能を高めたい」「いろいろなリズムに対応できるようにしたい」との課題意識にかかわる記述が増加していく傾向にあった。

表2. ダンス授業受講前および中における自信の根拠に関する記述

受講前												
「踊る自信」記述=40個			「創る自信」=33個			「指導する自信」=42個						
	ネガティブコメント	32	ポジティブコメント	8	ネガティブコメント	28	ポジティブコメント	5	ネガティブコメント	40	ポジティブコメント	2
1	未経験だから	46.9%	見たことあるからやれそう 好きだから出来そう…etc	未経験だから	53.6%	見たことあるものはできそう・ 学習すればできそう・好きな感じ ならできそう…etc	知識がないため	35.0%	知識をつければできる ・技術が身に付けばできる			
2	技術がない	18.8%		無知・わからない	25.0%		技術がないため	25.0%				
3	リズム感がない	9.4%		技術がない	14.3%		ダンス未経験なため	25.0%				
授業中盤												
「踊る自信」記述=40個			「創る自信」=35個			「指導する自信」=34個						
	ネガティブコメント	8	ポジティブコメント	32	ネガティブコメント	5	ポジティブコメント	30	ネガティブコメント	19	ポジティブコメント	15
1	うまくはない・苦戦するないよ うもある・速い動きが苦手、 思ったより難しい…etc		思ったより楽しく踊れた	37.5%	慣れても苦手・創るのは難しい …etc		学習したことを活用できているから	36.7%	知識がない・言語化できないため	36.8%	技術が身に付いてきたから	40.0%
2			学習が自信に	25.0%			リズムかとれるようになったから	16.7%	技術がないため	31.6%	知識がついてきたから	26.7%
3			踊り方がわかってきた	9.4%			協力すればできる	10.0%	指導は難しいと思うから	31.6%	ペア学習で教え合いに成功したから	26.7%

以上の結果から、「踊る」ことへの自信がない根拠としてあげられた「技術がない」「リズム感」がないことに対し、本研究で実践した教材の有効性が示唆された。そして、次第に技術やリズムを取りながら動く事への課題意識が芽生えていく傾向があることから、踊る意欲の向上にも貢献した可能性が示唆された。

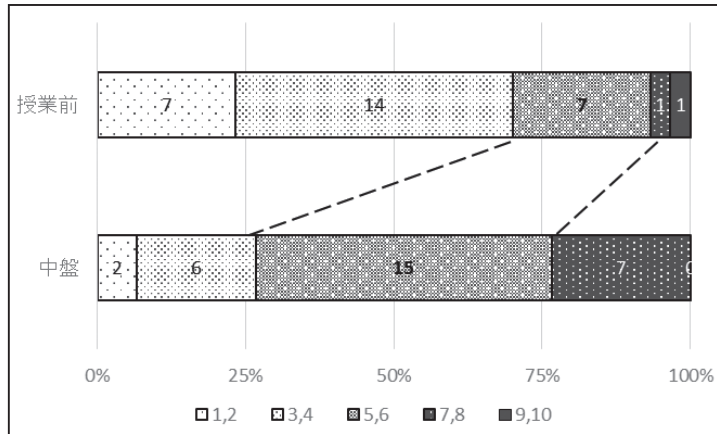


図1. 「踊ることへの自信」について (n 30)

2.2. 学習形態・指導過程の工夫の有効性：ダンスを「創る」自信について (図2, 表2 参照)

2.2.1. ダンス授業受講前の「創る」ことへの自信

対象者の授業受講前における「創る」ことへの自信は、平均3.2と低い傾向であった。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は14名、次いで3,4は10名、中程度5,6は3名、やや自信のある7,8は2名、次いで9,10は1名であった。

以上のように、10段階中「創る」ことへ自信がない1~4を示した学生が24名と「踊る」ことへの自信より少し多い傾向にあった。自信を示す数値の根拠に関する自由記述は33個あげられた。ネガティブな記述は28個みられ、「未経験だから」53.6%、「無知・わからない」25.0%「技術がない」14.3%と小学校~高等学校におけるダンス授業を経験していない学生や経験していてもダンスを「創る」ことに自信を持っていない学生がいることがわかった。それに対し、ポジティブな記述は5個みられ、「見たことあるものならば」「学習すれば」できそうとの記述も少数みられた。

2.2.2. ダンス授業中盤の「創る」ことへの自信

対象者の授業中盤における「創る」ことへの自信は、平均4.8と中程度に迫るものであった。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は4名、次いで3,4は10名、中程度5,6は9名、やや自信のある7,8は6名、次いで9,10は1名であった。

以上のように、受講前に比べて1~4を示した学生は14名と少し減少し、中程度である5,6を示した学生が15名、やや自信のある7,8を示した学生が6名となり、「創る」ことへの自信が徐々に高まる傾向がみられた。自信の根拠に関する自由記述は35個あげられ、ポジティブな記述が増えて30個であった。その内容は「学習していることを活用できている」36.7%、「リズムが取れるようになった」16.7%「協力すればできる」10.0%と、本授業で実施した授業内容が創作活動へポジティブに作用していることが示唆された。本研究で計画した授業では、学習のねらいとW-up・主な学習の内容の関連を図るよう計画・実践したが、「学習することを活用できている」との記述は、この学習指導過程が効果的であったことを示唆するものといえる。また、「リズムが取れるようになった」ことを「創る」ことへの自信として記述していることは、現代的なリズムのダンスの創作にはリズムの特徴をとらえてステップや動きを組み合わせる学習であることを理解することができることの現れともいえる。

2.2.3. ダンス授業受講前と中盤の「創る」ことへの自信の変容について (図4 参照)

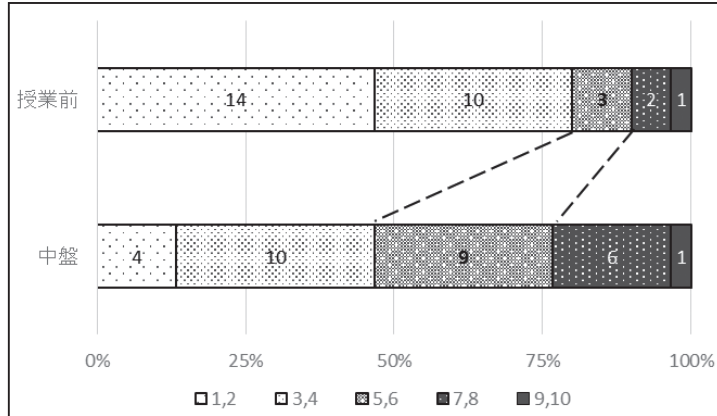


図2. 「創ることへの自信」について (n 30)

対象者の受講前と中盤における「創る」ことへの自信について、受講前に比して中盤では平均 1.6 ポイント高くなり、0.001% 水準で有意に高まっていた。

学習カードの記述を見ると作品創作の学習が本格的にはじまった3回目の記述には、少数ではあるが「組み合わせる楽しさがある」「さまざまなリズムの取り方で作品ができた」との記述がみられはじめた。4回目では「うまく組み合わせられるようになってきた」という記述に対し、「楽しいけれど創作は難しい」との「創る」ことへの自信に差が見え始めたが、「同じステップでもリズムを変えると表情が変わる」ことを発見した学生や、「もっと工夫して動きを組み立てられるようになりたい」と意欲を見せたり「アップテンポなリズムで全身を使うと楽しい」と現代的なリズムのダンスの本質に迫ろうとしたりする記述もみられた。5回目・6回目になると、「創作することに慣れてきた」という記述が増え、専門用語を使用しながらその授業での学びや今後の課題を記述する学生がみられるようになった。また、「音楽の特徴をとらえて踊れるようになりたい」との記述もみられるようになり、自分たちなりに音楽を表現しようとする意欲がみられた。

以上の結果は、本研究で計画した授業の中で、作品創作に向けた技能・知識の習得→習熟の過程を、ペア学習を中心とした小集団で協同的に行かせたこと・毎時発表する機会を設けたこと・親しみやすくリズムの取りやすい音楽を用いることが効果的であることを示唆するものといえよう。

2.3. 技能・知識の定着と指導観の構築：ダンスを「指導する」ことへの自信について (図3, 表2 参照)

2.3.1. ダンス授業受講前の「指導する」ことへの自信

対象者の授業受講前における「指導する」ことへの自信は、平均 2.6 と今回調査した「踊る・創る」への自信と比して最も低い傾向にあった。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は18名、次いで3,4は6名、中程度5,6は5名、やや自信のある7,8は1名、次いで9,10は0名であった。

以上のように、10段階中「指導する」ことへ自信がない1~4を示した学生が24名と「踊る」ことへの自信より少し多く、「指導する」ことへの自信と同値であった。自信を示す数値の根拠に関する自由記述は42個あげられた。ネガティブな記述は40個みられ、「知識がない」35.0%、「技術がない」「未経験なため」25.0%と、「踊る・創る」ことへの自信の根拠と比べて、経験がない・経験が浅いため知識や技術がなく、指導するイメージを持っていないことを不安に思っている学生が多い実態がうかがえた。それに対し、ポジティブな記述は2個みられ、「知識をつければ」「技術が身につけば」できそうとの記述も少数みられた。

2.3.2. ダンス授業中盤の「指導する」ことへの自信

対象者の授業中盤における「指導する」ことへの自信は、平均4.3と中程度には届かなかったものの、受講前よりは高値を示した。そのうち、10段階中最も自信がない1,2を示した学生は6名、次いで3,4は8名、中程度5,6は14名、やや自信のある7,8は2名、次いで9,10は0名であった。

以上のように、受講前に比べて1~4を示した学生は14名と少し減少し、中程度である5,6を示した学生が14名、やや自信のある7,8を示した学生が1名となり、「指導する」ことへの自信が徐々に高まる傾向がみられた。自信の根拠に関する自由記述は34個あげられ、ポジティブな記述が増え19個であったが、ネガティブな記述も15個と、授業中盤の「踊る・創る」への自信と比して多い傾向にあった。ポジティブな記述の内容は「技術が身についてきた」40.0%、「知識がついてきた」「ペア学習で教え合いに成功した」26.7%であった。一方で、ネガティブな記述の内容は「知識がない・言語化できない」36.8%「技術がない」「指導は難しいと思う」31.6%であった。

この結果から、本授業で実施した内容が技術・知識の習得に効果的である可能性・ペア学習による教えあいが模擬実践につながり、自信につながりつつあることが示唆された。一方で、授業中盤においてはまだ指導するには知識・技術は未熟と感じ、指導することが難しいという思いを抱いている学生がい

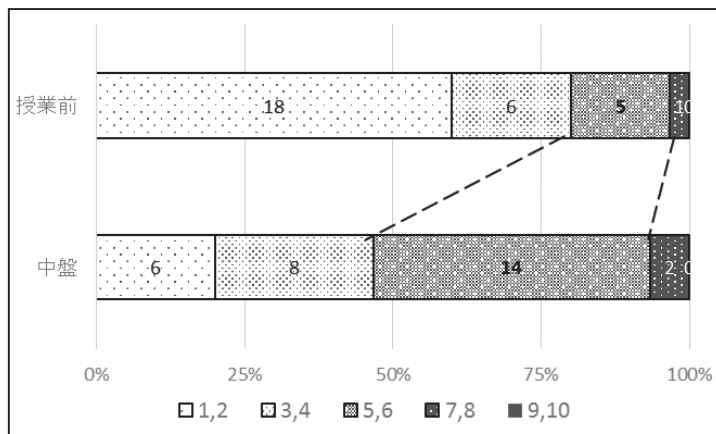


図3. 「指導することへの自信」について (n30)

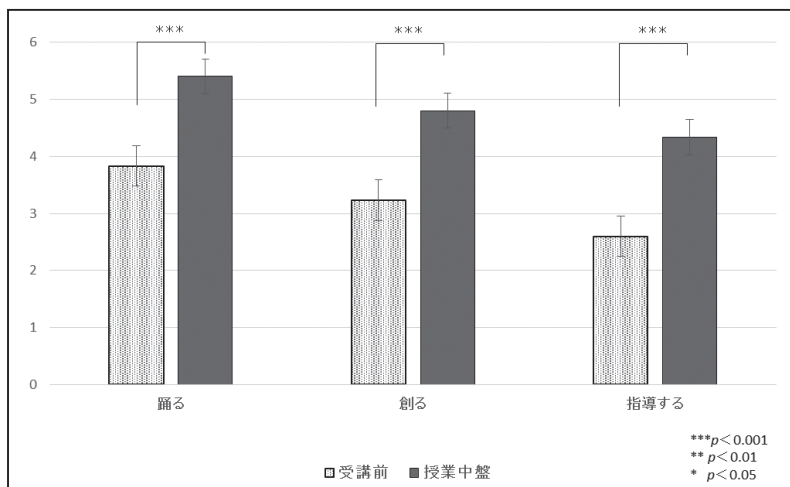


図4. ダンス授業受講前・中盤におけるダンスへの自信の変容 (n30)

ることがわかった。後者についてはむしろ、筆者としてはポジティブに受け止めており、今後の知識・技術の習得に向けた課題意識あるいは指導者としての視点をもった受講が期待できる記述と受け止められる。

2.3.3. ダンス授業受講前と中盤の「指導する」ことへの自信の変容について (図4, 表2)

対象者の受講前と中盤における「指導する」ことへの自信について、受講前に比して中盤では平均1.7ポイント高まり、0.001%水準で有意に高まっていた。

学習カードの記述を見ると、「指導する」ことに対する直接的な記述は見られないが、理解できてきたことや習得した技術に関すること、ペアやグループでの学習にかかわる記述がみられた。例えば「カウントや動く部位を声に出しながら踊ると、かかわりやすく練習しやすい」との記述が各所にみられたが、とりわけフォークダンスの学習のねらいにおいて〈カウントや動き方を声に出しながら練習できるようになる〉など、かかわり方・練習の仕方にかかわるねらいを設定していたことが、作用したものと思われる。

また、「学習したことを活かして創作できている」「すべてフリーではなく、学習した中から選択することで創作しやすい」「ペアで同調・ずらすなど学習していたのでグループに活かした」など、作品創作に向けた教材や学習形態の考え方に関する記述がみられた。このことは、毎時の学習内容を整理・精選してミニマムの確実な習得を心掛けたこと・少数から小集団へ学習形態の工夫をしたことが、作用したものと思われる。

2.4. ダンスの「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について (図5, 6)

2.4.1. ダンス授業受講前の「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について

対象者のダンス授業受講前における「踊る・創る・指導する」への自信について、それぞれの差を検討した結果、「踊る」に比して「指導する」が有意に低値を示し (** $p < 0.01$)、「創る」に比して「指導する」が有意に低値を示した ($p < 0.05$)。「踊る」と「創る」の間には有意な差はみられなかった。この結果から、ダンスあるいはダンス授業の経験がない・浅い学生にとって、「踊る・創る」ことへの不安も大きい、「指導する」ことに向けてはより大きな不安を抱いていることがわかった。

2.4.2. ダンス授業中盤の「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について

対象者のダンス授業中盤における「踊る・創る・指導する」への自信について、それぞれの差を検討した結果、「踊る」に比して「指導する」が有意に低値を示し (** $p < 0.001$)、「踊る」に比して「創る」が有意に低値を示した ($p < 0.05$)。「創る」と「指導する」の間には有意な差はみられなかった。

以上のように、受講前と同様に中盤においても「踊る」ことと「指導する」ことへの自信に有意な差がみられたことから、より指導する視点を持たせる仕掛けを考えていく必要があると考えられる。ただし、現状ではダンスや授業の経験がない・浅い学生が多いことから、単元前半は親しむことと習得・活用することを中心に、単元後半からより指導する視点を強調しながら授業を展開することも一つの在り方だと考えられる。

また、中盤では「創る」に比して「指導する」が有意に低値を示した。このことは、作品創作の学習を進めることで創作することの難しさを実感したことにより、指導することへの不安が現れたものと考えられる。このことから、創作するために必要な知識を定着させる工夫を仕掛ける必要があると考えられる。

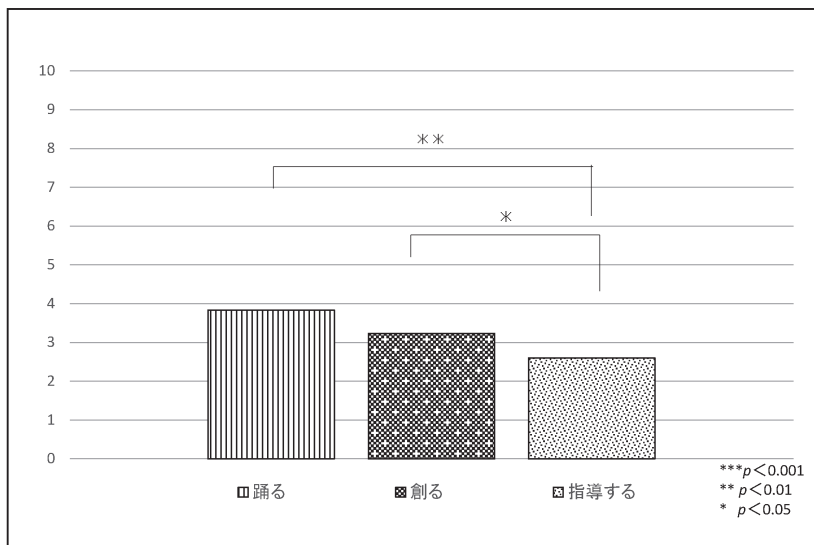


図 5. 授業受講前のダンスについての自信 (n 30)

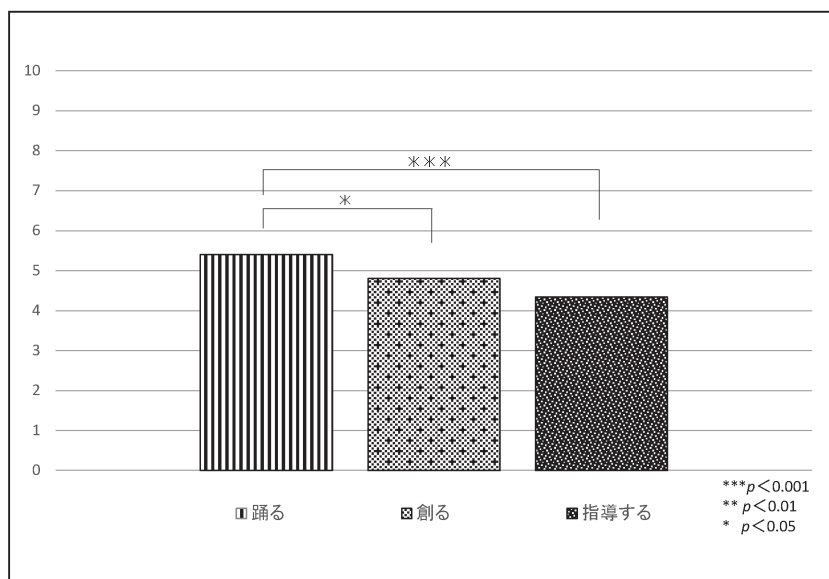


図 6. 授業中盤のダンスについての自信 (n 30)

3. 小学校～高等学校までのダンス授業経験の有無おける

ダンスを「踊る・創る・指導する」ことへの自信について (図 7)

対象者 30 名のうち、小学校～高等学校においてダンス授業を経験したことのある学生 (経験あり群) は、9 名であった。本項では、経験あり 9 名とダンス授業未経験者 (経験なし群) 21 名との間のダンスを「踊る・創る・指導する」ことへの自信について比較検討することとした。

3.1. 経験の有無による比較

ダンス受講前のダンスを「踊る・創る・指導する」ことへの自信について平均を比較した結果、経験あり群と経験なし群の間に有意な差はみられなかった。具体的には「踊る」については、経験あり群 3.6 に比し経験なし群が 4.0 とほとんど差がみられなかった。「創る」については、経験あり群 3.9 に比し経験なし群 3.0 とわずかに経験なし群が低値を示した。「指導する」については、経験あり群 2.8 に比して経験なし群は 2.5 とほとんど差がみられなかった。

この結果から、小学校～高等学校までのダンス授業がダンスへの自信につながっているとは言えず、ダンス領域に関する基礎・基本的な技能・知識の保障に課題があることが示唆された。ゆえに、中村(2009)が報告しているように、指導力不足・指導者不足の実態はいまだに潜んでいる可能性があると思われる。

3.2. 経験あり群間・経験なし群間におけるダンス受講前と中盤の

「踊る・創る・指導する」ことへの自信について

経験あり群の、ダンス受講前と中盤における「踊る・創る・指導する」ことへの自信の変容について検討した結果、受講前に比して中盤が「踊る ($**p<0.01$)」「創る ($*p<0.05$)」「指導する ($*p<0.05$)」とすべての要素において有意に高値を示した。

経験なし群の、ダンス受講前から中盤への「踊る・創る・指導する」ことへの自信の変容について検討した結果、受講前に比して中盤が「踊る ($***p<0.001$)」「創る ($***p<0.001$)」「指導する ($***p<0.001$)」のすべての項目において有意に高値を示した。

以上のように、ダンス授業の経験の有無に関係なく、本研究で計画した学習指導過程はダンスへの自信を向上させる可能性が示唆された。ただしこの結果には、経験あり群が高等学校でダンス授業を受けていないことが影響していたと思われることから、ダンス必修化以降にダンス授業を経験してきた年代の学生の検討も今後必要といえる。

3.3. ダンスの「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について

経験あり群間および、経験なし群間において、ダンスの「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について検討した結果、経験なし群についてののみ、項目間で有意差がみられた。

経験なし群では、ダンス授業受講前の「踊る」に比して「指導する」が 0.01% 水準で有意に低値を示した。くわえて、ダンス授業中盤の「踊る」に比して「創る」が 0.01% 水準で有意に低値を示し、「踊る」に比して「指導する」が 0.01% 水準で有意に低値を示した。

この結果から、経験なし群の学生には、経験あり群の学生に比して、授業受講前に抱いている「創る・指導する」ことへの不安が大きいことが示唆された。さらに、経験なし群における授業の中盤においても「踊る」ことと「創る・指導する」ことの間には有意差がみられた。このことから経験なし群の学生には授業中盤までに「踊る」ことへの自信は高まりつつあるが、「創る・指導する」ことへの消極的であったため、単元後半の経過の観察を加えて再検討するとともに、授業中盤にかけての創作にかかわる支援や教え合いの際の手法の工夫など「創る・指導する」ことへのアプローチ方法を検討する必要があることがわかった。

4. 学習指導過程の有効性：

ダンスを「踊る・創る・指導する」自信の変化とその根拠について (図 8, 表 3)

ここでは、ダンス授業受講前からダンス授業中盤にかけて、自信がよい方向に変化したかどうか、その変化の大きさを 10 段階で問うとともに、その根拠について自由記述してもらった内容を分類した結果をもとに学生のダンスへの自信を向上させた要素を抽出し、本研究で計画した学習指導過程の有効性

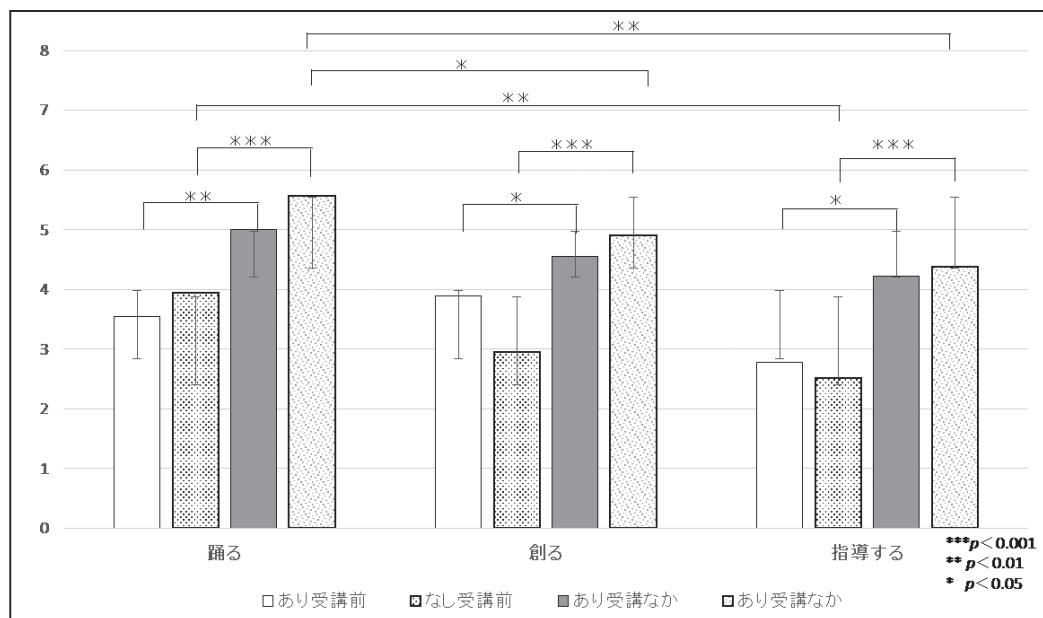


図7. ダンスについての自信
ダンス授業経験者・未経験者の比較 (n 30)

の検討と授業改善の示唆を得ようとした。

4.1. ダンス授業受講前から中盤にかけてのダンスへの自信の変化の大きさについて

対象者30名に対し、ダンスへの自信がよい方向へ〈大きく・やや大きく(10段階中10~7)〉変化したと答えた学生は16名、〈ほどほど(10段階中6,5)〉は11名、〈やや小さく・小さく(10段階中4~1)〉は3名であった。

以上のように、本研究で計画した学習指導過程の実践を通してダンスへの自信がよい方向へ大きく・やや大きく変化した学生が半数を超え、中程度も11名いたことから、この学習指導過程は教員志望の学生たちにとって、ダンスを「踊る・創る・指導する」ことへの自信を向上させる内容として、効果的であったことが示唆された。

4.2. ダンスへの自信が変化した根拠について

上記のとおり、本研究で計画した授業は、ダンスを「踊る・創る・指導する」ことへの自信を向上させる効果があることが示唆された。ここからは、ダンスへの自信がよい方向へ変わった根拠について、変化の大きさ別の特徴を探るとともに、記述の数から特に有効と思われる学習内容や学習方法について検討していきたい。

4.2.1. ダンスへの自信が〈大きく・やや大きく〉変化した群の記述の特徴

ダンスへの自信が〈大きく・やや大きく〉変化した群(変化大群)では、16名から26個の記述が抽出された(表3)。そこにおいて、「ペア学習が効果的」に分類される記述が一番多くみられた。

例えば「ペアで学習すると効率的に習得・創作できた」「ペアでの学習はコミュニケーションが深まって、学習進度が高まる」などが挙げられた。次いで見られたのは、「W-upの内容」に分類される記述であった。例えば「W-upが親しみやすく学習意欲がわいた」「W-upと学習内容が関連していて活用

しやすかった」などが挙げられた。次いで「多様な教材（音楽）」が挙げられた。

以上のことから、変化大群は知識・技能の獲得や創作活動の促進に向けて効果的だと感じた学習形態や教材について挙げているようだった。他の記述を見ても、「復習」「教具」「示範」「ノートの活用」など学習内容とかわった内容が多い傾向にあった。

4.2.2. ダンスへの自信が〈ほどほどに〉変化した群の記述の特徴

ダンスへの自信が〈ほどほどに〉変化した群（変化なか群）では、11名から15個の記述が抽出された（表3）。記述の項目の重なりは少なかったが、変化大群と同様に「ペア学習が効果的」に分類される記述が一番多くみられた。例えば「ペアで学習するとリズムをつかみやすい」などの記述がみられた。次いで「W-upの内容」「技術の獲得」に分類される記述がみられ、踊る技能を高めることに関連する内容を挙げているようだった。また、変化大群と同様の項目としては「ノートの活用」「知識の獲得」「技術の獲得」「示範」「教具」「復習」であった。

4.2.3. ダンスへの自信が〈やや小さく・小さく〉変化した群の記述の特徴

ダンスへの自信が〈やや小さく・小さく〉変化した群（変化小群）では、3名（10段階中2=1名, 3=1名, 4=1名）から5個の記述が抽出された（表3）。特徴的だったのは、3名中2名（10段階中2,3）が「慣れた」と記述しており、彼らにとってダンスに慣れるまで90分×7回かかったととれる。他方、10段階中3と4を示した学生らは「W-upが親しみやすかった」との記述もしており、ダンスへの自信の向上が緩やかな学生に向けてはW-upの内容が学習内容の習得に向けて重要であることが示唆された。

4.2.4. ダンスへの自信が変化した根拠からみえた有効な学習内容・方法について

ダンスへの自信がよい方向へ変わった根拠について調査した結果から、ダンスへの自信がよい方向へ変わるのに有効だと示唆される要素は「ペア学習」「W-upの内容」であった。

「ペア学習」など小集団による協同学習は、近年、主体的・協働的な学びの実現に向けて積極的に扱われている。体育授業においてはスポーツ・運動を素材としていることから、そもそもスポーツ・運動を実践することが協働的な学びだと思いがちだが、いま求められているのは「ただ一緒に楽しむ」「ただ一緒にプレイする」のではなく、知識・技能を確実に習得させながら思考・判断の伴うかわり合いを保障する授業である（中教審, 2015）。ダンスでいえば、アクティブ・ラーニングだと言って、ただペアと一緒に踊らせるのではなく、社会性の担保や情意的な開放とともに、学習内容によっては技能と知識の優位性を考慮しながら（栗田, 2015）習熟を図らせ、習得した知識・技能の活用をさせるような学びを目指していかなければならない。本研究では、これらのことを考慮してW-upから〈学習①〉〈学習②〉に至るまでの一貫性を重視し、学習したことを活用させるよう促しつつ学習のまとめや発問の機会を重視して授業を実施した。さらに、これらの過程についてペア学習を用いて実施することにより、互いの依存性を高めて責任を果たすよう促した結果、技能の高まりとともに知識が積み重なり、保健体育科教員を目指す学生のダンスへの自信につながったのではないだろうか。

このことと関連して「W-upの内容」については学習内容を一貫させる視点から、とりわけ現代的なリズムのダンスのW-upにおいて、毎時取り扱う動き・ステップの下位教材や組み合わせ例を多く取り扱うよう心掛けた。一貫性をもたせる根拠は、リズムに乗る・リズムに合わせて全身運動する・次々と動きを展開する感覚に慣れてほしい思いであり、つまり基礎的運動感覚を身につけることを意図しているのである。

このいわゆる感覚づくりとは、器械運動にて多く用いられる教材の考え方であるが、主教材（技）に

表3. ダンス授業を通してよい方向へ自信がついた根拠（記述）

	大きく・やや大きく=16名	ほどほどに=11名	やや小さく・小さく=3名			
1	ペア学習が効果的	7	ペア学習が効果的	3	慣れた	3
2	W-upの内容	5	W-upの内容	2	W-upの内容	2
3	多様な音楽・内容	2	技術が獲得	2		
4	かわりやすい内容・展開	2	学習内容の活用ができるように	1		
5	技術の獲得	1	習得・活用の展開	1		
6	復習による習熟機会	1	復習による習熟機会	1		
7	教具(ハンドドラム)	1	教具(ハンドドラム)	1		
8	知識の獲得	1	知識の獲得	1		
9	示範	1	示範	1		
10	ノートへの記録	1	ノートへの記録	1		
11	90分の構成	1	雰囲気が良い	1		
12	学習の積み重ね	1				
13	達成感を得る機会が多い	1				
14	教師が楽しんでいて、入り込みやすい	1				
	コメント数	26	15	5		

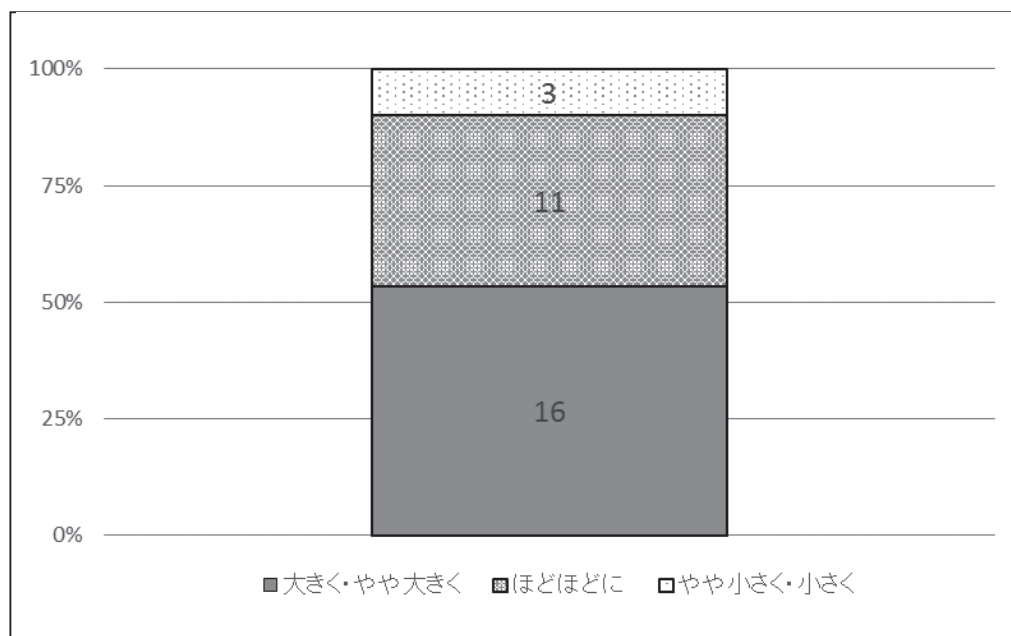


図8. ダンスについての自信がついたか (n30)

対して「運動のアナログン（類似性）」（三木，1995）の考えに立った下位教材を設定し，主教材の学習に必要な感覚を養おうとするものである。例えば佐藤ら（2009）は，「首はね跳び」のアナログンになりうる運動を下位教材として開発し小学校6年生で実施したところ，下位教材の達成率と「首はね跳び」の達成率との間に有意な相関関係がみられ，教材の有効性が示唆された。今もなお，さまざまな研究されているところではあるが，アナログンになりうる運動を用いた感覚づくりが運動の習得に有効である（細越ら，2001）ことは多くの有識者が述べていることである。

ただし，ダンスは決まった動きはないためアナログンの考えに立って教材をつくるには限界があるし，そのような取り組みばかりでは自由度がなくなってしまう。ただ，教師が引き出したい，学習のねらいに関連した動きというものは存在するはずである。とりわけ，回転やリズムに特徴のある動きなど複雑な動きを引き出そうとすると，動きの発展につながるような基盤となる動きや展開の仕方例を盛り込むことで，ダンスやダンス創作の「感覚づくり」を意図したW-upになるものと考える。本研究ではこの考えに立って実践したわけだが，この取り組みが印象に残り，即興に活かしたり創作に活かしたりしていたことから，ダンスへの自信がよい方向へ変化した根拠として挙げた学生が多かったものと思われる。このことから，心の解放に向けた「ただ楽しいW-up」だけではなく，本時の学習内容を意識したW-upを取り扱うよう心掛けたほうが，保健体育科教員を目指す学生にとっては，ダンスへの理解にもつながり，自信につながると示唆された。

さいごに，わずか2名ではあったが，「ノートへの記録」に関する記述に注目したい。それぞれ，「ノートに図解することが理解につながっている」「ノートで復習できる」との内容であった。この記述をした学生は，図9のように学習したフォークダンスや，図10のように創作した作品を記録している。毎時の復習の際に，ペア学習を通して改めて気づいた留意点や練習のポイントについて追記を促しているが（図11），当該学生は自分なりに追記を加えている。この2名は「ダンスへの自信」の変化が大き

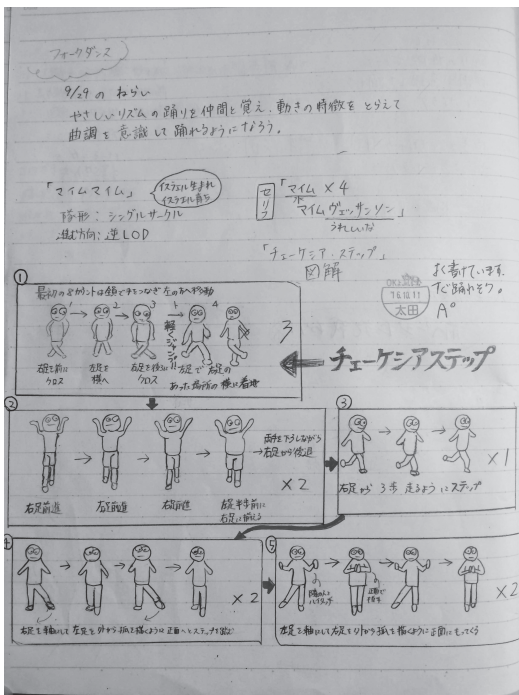


図9. フォークダンスの記録

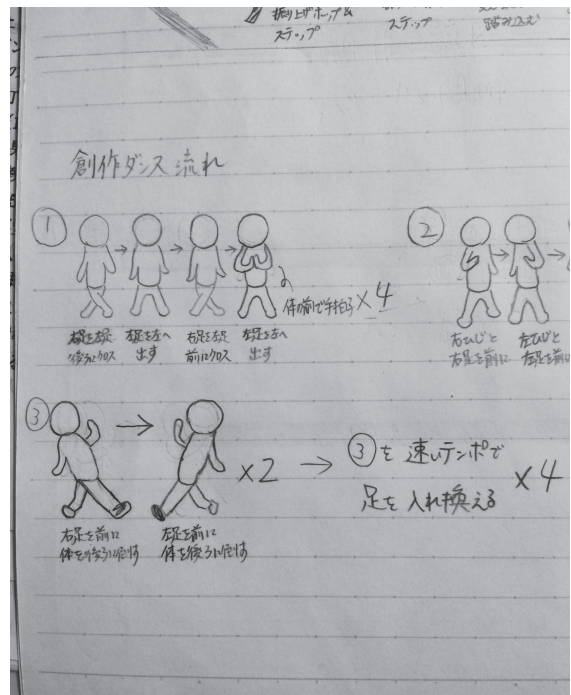


図10. 現代的なリズムのダンスの創作作品の記録

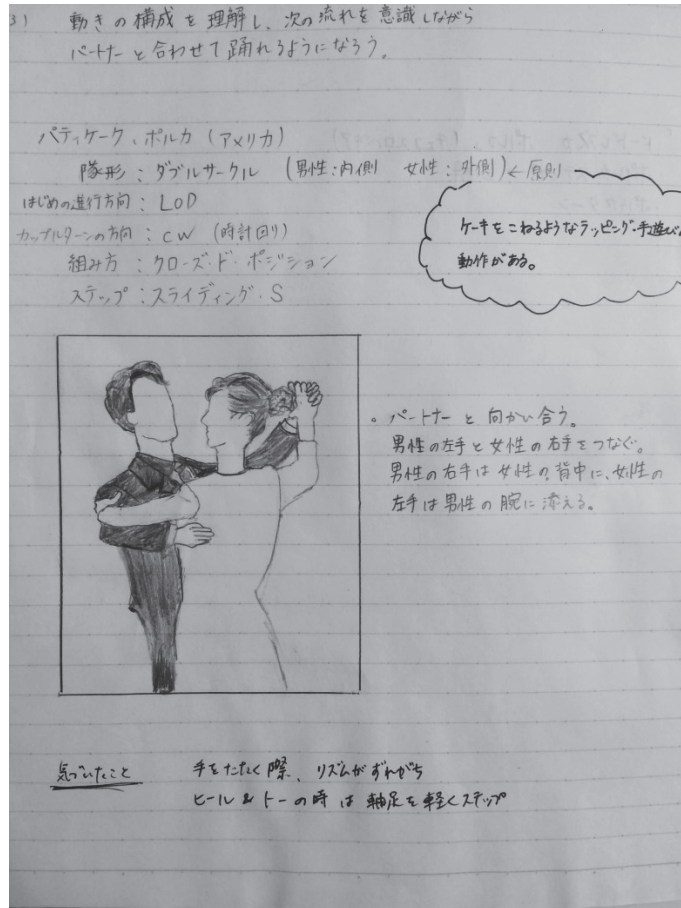


図 11. 復習を通して気づいたこと

な学生であったことから、ノートなど形に残るものへの記録を着実にさせる支援を一層充実していくことが、変化が小さかった学生や「創る」「指導する」ことに自信がなかなか抱けない学生に対する支援につながり、ダンス授業の充実につながるのではないだろうかと考える。

IV. まとめ

1. まとめ

本研究では、保健体育科教員養成課程の学生を対象として、ダンスの技能・知識の確実な習得、およびアクティブ・ラーニングの実践を考慮した学習指導過程を計画・実践し、その授業の有効性について履修学生の自由記述および「踊る・創る・指導する」ことに対する自信の程度の経過から検証することを目的とした。その結果、以下のような知見が得られた。

1. ダンス授業受講前と中盤における「ダンスへの自信」を調査した結果、次のことがわかった。

「踊る」「創る」「指導する」自信について、それぞれ有意に向上していた。このことから、本研究で計画した学習指導過程で採用した教材・学習形態・指導過程は「ダンスへの自信」を育くむのに有効であること、指導観の構築にも作用していたことが示唆された。

2. ダンスの「踊る・創る・指導する」ことへの自信の相互の関連について検討した結果、次のことがわかった。

ダンス受講前において、ダンスを「指導する」ことへの自信は、「踊る・創る」ことへの自信より有意に低値を示した。一方で、中盤は同じく「指導する」「踊る」の間と、くわえて「踊る」「創る」の間に有意差がみられた。このことから、「指導する」「創る」ことへの自信の向上に向けて、①単元前半は親しむことと習得・活用することを中心に、単元後半からより指導する視点を強調しながら授業を展開すること②創作するために必要な知識を定着させる工夫を仕掛けることが必要であることが示唆された。

3. 小学校～高等学校におけるダンス授業経験者と未経験者として「ダンスへの自信」の比較をしたところ、有意差はみられなかったが、経験あり群間・経験なし群間ともに、受講前から中盤にかけて自信を示す数値が有意に高まっていた。

このことから、本研究で計画した学習指導過程は経験の有無に関係なく、「ダンスへの自信」を向上させるのに有効であることが示唆された。

他方、「踊る」「創る」、「踊る」「指導する」、「創る」「踊る」との関連を検討した。その結果、経験なし群はダンス授業受講前に「創る・指導する」への自信が経験あり群に比して有意に低いことがわかった。また、経験なし群は、授業が進んでいっても「踊る」ことと「創る・指導する」こととの間に有意差がみられたことから、単元後半の経過の観察を加えて再検討するとともに、授業中盤にかけての創作にかかわる支援や教え合いの際の手法の工夫などが必要であることが示唆された。

4. 本研究で計画した学習指導過程の有効性について、「ダンスへの自信がよい方向へ変化したか」10段階で問うた結果、〈大きく・やや大きく〉変化した学生が16名・〈ほどほどに〉変化した学生が11名・〈やや小さく・小さく〉変化した学生が3名であり、本研究で計画した学習指導計画が有効であることが示唆された。

また、ダンスへの自信がよい方向へ変化した理由について自由記述を求めた結果、変化大群と変化なか群に共通して「ペア学習が効果的」「W-upの内容」の記述がなされ、これらが学習指導過程において自信を育むのに有効である可能性が示唆された。ただし、少数ではあるが本研究で計画した学習指導過程の中盤ではまだ「慣れた」段階に留まっている学生がいることも明らかとなった。

2. 今後の展望

以上のように、本研究で計画した学習指導過程は、保健体育科教員養成課程の学生の「ダンスへの自信」を育むことができる可能性があることがわかり、「踊る・創る・指導する」力の育成に向けて重要な示唆を得ることができた。これから、単元後半の検討も加えていき、学習指導過程全体の有効性について検討していきたい。

今回有効であることが示唆された「ペア学習」については、相互依存の側面があるにもかかわらず、かかわり方の支援をしなければまったく心を開けないということもあり得る。学習を深めていくにはよい手法であるが、大学生の、とりわけ教員志望という動機づけがなされた学生だから通用したともいえる。学生たちには、その点を十分に理解させながら、目の前の生徒に合った学習形態や指導スタイルを採用するよう促す必要がある。

また、今回の研究は学生の自己評価と自由記述による研究であったが、学生の記述と実際が合致しているかどうかの問題である。今後は、実際にペア学習をしている際の逐語記録をとって対話の質を検証することや、学習による動きの発展について検討し、教員養成大学のダンス授業の充実に向けて努力していきたい。

V. 引用・参考文献

- 1) 岩田 靖・江藤由佳 (1999) 「表現運動・ダンス領域における「新聞紙」の授業に関する一試論」長野体育学研究 Vol. 10
- 2) 岩田 靖「武道とダンスの今日的課題を探る」体育科教育『特集 武道とダンスの必修化を検証する』3月号, p. 14
- 3) 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論社
- 4) 教育職員養成審議会 (1997) “新たな時代に向けた教員養成の改善方策について” 1997-07-01. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm, (参照 2016-04-27) p. 10, 11, 17
- 5) 栗田昇平 (2015) 「協同学習モデルの体育授業への適用過程とその成果」体育科教育学研究, Vol. 32 (2)
- 6) 佐藤孝祐・太田早織・小林博隆・末永祐介・佐々木浩・高橋健夫 (2009) 『小学校体育授業における「首はね跳び」の学習可能性の検討——特に下位教材及び学習指導過程の開発に関連して——』スポーツ教育学研究 Vol. 29 (1)
- 7) 中央教育審議会 (2015) “これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて” 2015-12-21
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf, (参照 2016-04-27) p. 16
- 8) 中村恭子 (2009) 「中学校ダンスの男女必修化の課題——中学校教員を対象とした調査にもとづいて——」順天堂スポーツ健康科学研究, Vol. 1 (1)
- 9) 中村恭子 (2013) 「日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題」スポーツ社会学研究 No. 21 (1)
- 10) 細越淳二, 中村剛, 米村耕平, 高橋健夫 (2001) 「開脚跳びの習得に有効な運動のアナログンになりうる練習課題についての検討」スポーツ教育学研究, Vol. 21, No. 2
- 11) 三木四郎 (1995) アナログン. 阪田直彦・高橋健夫・細江文利編集. 学校体育授業事典. 大修館書店: 東京.
- 12) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編, 東山書房, 京都
- 13) 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編, 東山書房, 京都
- 14) 文部科学省 (2011) “言語活動の充実に関する指導事例集” 2011-05,
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1306108.htm, (参照 2013-10-01)
- 15) 文部科学省 (2012) “全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果” 2013-03,
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1332448.htm, (参照 2013-10-31)
- 16) 文部科学省 (2013) “学校体育実技指導資料第9集表現運動系及びダンス指導の手引き” 2013-05,
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/10/30/1336655_01.pdf, (参照 2014-12-31)
- 17) 文部科学省 (2015a) “教育課程企画部会 論点整理” 2015-08-26,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf, (参照 2016-4-1)
- 18) 文部科学省 (2015b) “これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)” (参照 2015-12-21)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm

(参照 2016-0401)

Examination on “teaching-learning process” of dance class in teacher training course ～Aiming to improve “dancing, ability of creative dance, ability of dance teaching”～

Abstract

The purpose of this research was to examine the “teaching-learning process” to foster their “ability of dancing, ability of creative dance, ability of dance teaching” about dance classes for teacher training course students. It was to get suggestions from the change of ‘confidence about dance’ during the dance class from before taking classes.

Method:

- (1) The subjects were 30 second-year university students.
- (2) We planned the “teaching-learning process” of dance classes incorporating ‘Active learning’.
- (3) Conducted the questionnaire survey (10 levels) in terms of the changes in the confidence in “dancing, ability of creative dance, ability of dance teaching” which is important for giving a dance lesson. In addition, we also reviewed from free description.

Result:

- 1) The “confidence in dance” at before the first class and at the middle of the course have shown significant improvement as; dance from 3.8 to 5.4 ($p < 0.001$), create from 3.2 to 4.8 ($p < 0.001$), lead from 2.6 to 4.3 ($p < 0.001$).
- 2) As a result of investigating on “Did you gain confidence in dance through the classes?” 16 students answered “Yes, significantly”, 11 students answered “Yes, moderately”, and 3 answered “Yes, slightly”. From the free description, we have understood that the learning in “pair-learning” was effective, and the motivation improvement and acquisition of skills and knowledge of the students had been led by W-up which is related to the learning contents and the contents of group learning. From these findings above, it is indicated that adopting the “pair-learning” as well as the W-up and skill-learning materials with consistency is important for developing the “ability to dance, create and lead” of students.

Key words; dance, teacher training course, teaching-learning process, pair-learning, active learning